

## 2016 年度 JROSG 海外出張支援報告書

山形大学医学部放射線腫瘍学講座 赤松妃呂子

JROSG 海外出張支援のもと、泌尿器腫瘍グループの調査研究として実施した膀胱小細胞癌に対する放射線治療に関するアンケート調査結果を第36回欧州放射線腫瘍学会にて発表させていただきました。ご支援に深く感謝申し上げます。

学 会 名：第 36 回欧州放射線腫瘍学会 (ESTRO)

開催場所：ウィーン、オーストリア

開催期間：2017 年 5 月 5 日～5 月 9 日

発表形式：ポスター

タイトル：

Radiotherapy aimed at functional preservation in patients with small cell carcinoma of the bladder

発表要旨：

【目的】本邦の膀胱小細胞癌に対する放射線治療に関して実施した JROSG 調査研究について報告する。

【方法】JROSG 関連施設に対してアンケート調査を実施した。1990 年から 2010 年に JROSG 関連施設にて根治的放射線治療が行われ、初回治療にて膀胱が温存されていた膀胱小細胞癌症例 12 例を対象に多施設遡及的解析を行った。

【結果】患者背景は年齢中央値 70.5 歳、男性 11 例、女性 1 例、病期は限局型 (TXN0-1M0) 10 例 (83.3%)、進展型 (TXN2-3M0-1) 2 例 (16.7%) であった。初回照射野は全骨盤が最多であり、総線量中央値 60.0 Gy、1 回線量中央値 2.0 Gy であった。経過観察期間中央値は 27.3 ヶ月、1 年全生存率、3 年全生存率は 75.0%、50.0% であった。1 年局所制御率、3 年局所制御率は 66.7%、55.6% であった。局所再発を 4 例で認めたが、治療後 7-54 ヶ月間自力排尿が可能であった。早期有害事象は血液毒性 (G3 以下)、腸炎 (G3, 1 例のみ) を認めたが、Grade 3 以上の晩期有害事象の出現はなく、全例で膀胱は温存されていた。

【結語】膀胱小細胞癌に対する放射線治療により膀胱温存が期待でき、局所治療の選択肢となる可能性が示唆された。